（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　奈倉 有里

本論文は、アレクサンドル・ブローク（1880－1921）を、主に伝記・批評史・詩学の観点から研究したものである。ブロークは 20 世紀初頭のロシアで活躍し、広範な読者層の支持を受けた詩人であり、ロシア・欧米では批評や研究の蓄積には相当なものがあるが、この詩人特有の捉え難さ・曖昧さゆえに、様々な矛盾した言説が彼を取り巻き続けてきた。本論文はそのような研究状況を踏まえ、詩人の伝記・批評史の再検討と作品そのものの分析を統合して、「象徴主義詩人」とは単純に規定できない複雑な全体像を提示する試みになっている。

伝記と批評史を扱う第Ⅰ部「自叙と解釈――批評への抵抗」は３章から成る。第１章は、この先の議論の前提として、詩人の父母と幼少時の創作について基本的な事実を確認する。第２章「『自伝』の解釈とナショナリズムの問題」では、詩人の『自伝』の解釈をめぐって、長年続けられてきた二つの論争を検討する。それは第一に、ドイツ系である父方のドイツ文化がブロークにとってどのような意味を持ったか、第二に、幼少期にヴェルレーヌを始めとするフランス詩にどれほど影響を受けたか、という議論である。どちらも外国文化の影響をめぐる論争だが、ナショナリズムのバイアスゆえに様々な歪みを伴ってきたことが跡付けられている。第３章「ブロークに対する批評／ブロークによる批評」は、生前ブロークが批評家や研究者によって用意される一定の解釈や評価の枠にはめられることを嫌う「曖昧」な存在であったことを確認したうえで、後世の批評家・研究者が彼の詩を分析する際に「意図的誤謬」と「同語反復」の両極の間で揺れながら、「批評不可能」な詩人を扱いかねてきた批評史を辿る。

詩学を扱う第Ⅱ部「『初恋』と『火』の詩学」は、２つの章に分かれる。まず第４章「初恋とアナムネーシス」は、ブロークのサドフスカヤ夫人との初恋をめぐる詩作が、ギリシャ語でアナムネーシス（想起）と呼ばれるプロセスによって生み出されたものであることを、書簡と詩の両方の緻密な分析を通じて明らかにしている。第５章「火の詩学――焼身から世界の火災へ」では、ガストン・バシュラールの『火の精神分析』を援用しながら、ブロークの詩学の核となる「火」の主題を取り上げ、多くの詩に即して分析する。そしてブロークの生涯が、幼少期に思いついた焼身自殺の物語から、最後の長編詩『十二』に現われる「世界の火災」に至るまで、一貫して火の詩学に貫かれていたことを描き出す。

多様な主題を野心的に盛り込んだため、構成に若干無理が生じている面もあり、また各章をつなぐ「曖昧」という概念についてさらに吟味が必要ではあるが、「捉え難い」と言われてきたブロークについて、このような包括的研究は類例がなく、創見を多く含む独創的な論考として高く評価できる。よって審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。